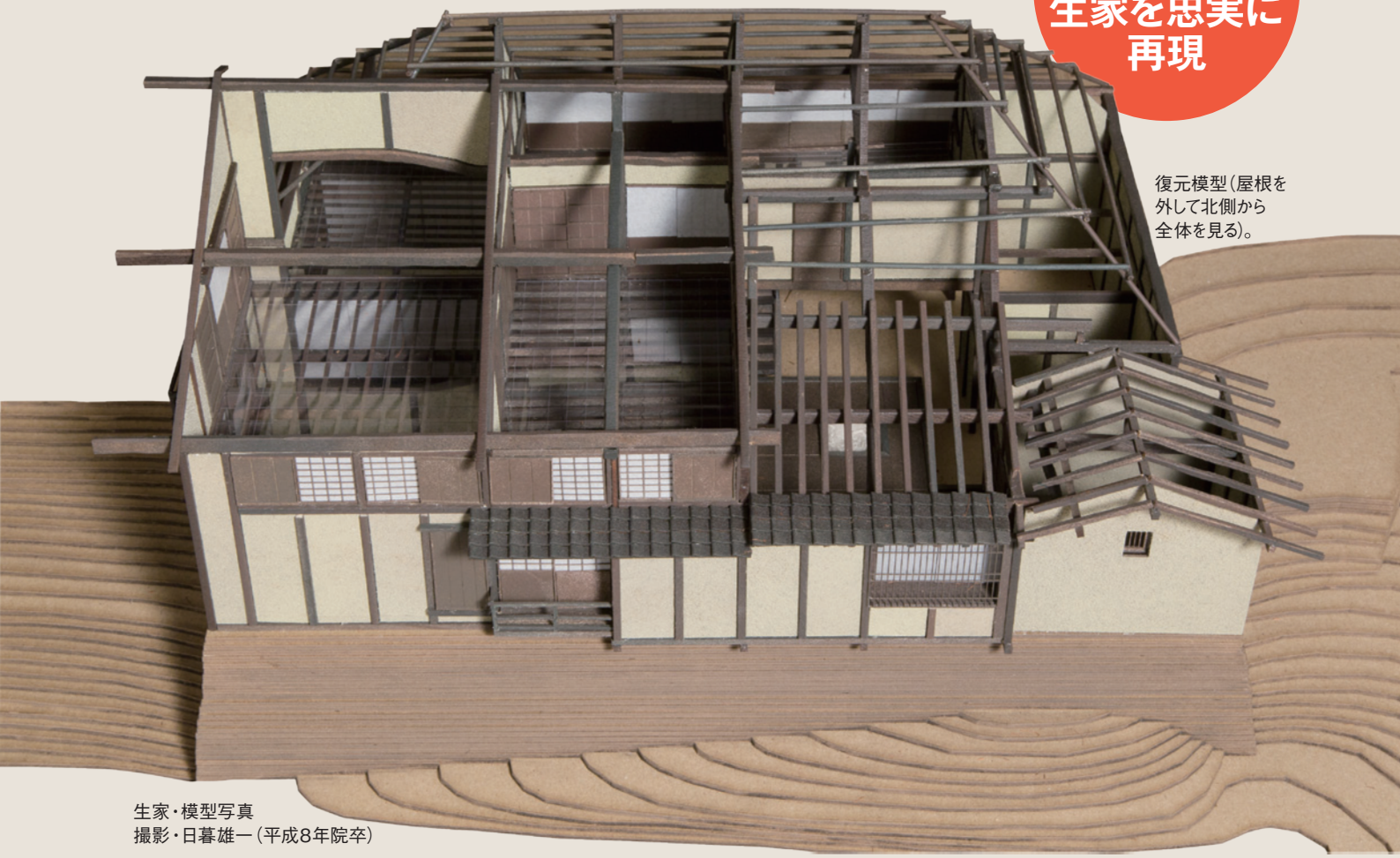
特集2 「五島慶太翁生家実測プロジェクト」続報

慶太翁生家実測模型ついに完成

慶太翁の少年時代の生家を忠実に再現



復元模型（屋根を外して北側から全体を見る）。

生家・模型写真
撮影・日暮雄一（平成8年院卒）

五島慶太翁（明治15（1982）年～昭和34年（1959）年）が生誕～青年期の約20年間を過ごした、出身地・長野県小県郡青木村殿戸に現存する生家を調査・実測し模型化する研究プロジェクトが、東京都市大学・工学部建築学科の勝又研究室により進められています。

その生家実測、周辺の方々へのヒヤリング等の様子については、前号のゆうわでも詳しくご紹介しましたが、今回その実測結果を元にした精密模型が完成しましたので、お知らせします。

約150年前、1868年（慶応4年）が明治維新ですから、討幕運動が始まる江戸時代末期の頃に建てられたこの生家は、現在の姿になるまで増改築が繰り返されたと、お伝えしました。それは、およそ6つのフェーズに分けられることがわかりました。慶太翁は誕生から1900年18～19歳まで在住していたと考えられることから、今回の生家模型は、第3フェーズの時代の復元を目指して制作されています。

現在の生家とは、屋根の形状、2階の壁位置、吹き抜けの位置、階段位置、外廊下などに相違点が見られるこの生家模型。その違いなどを、写真や図面から見ていきましょう。

（左）複雑に増築された屋根の様子も再現。（右）この模型の制作以前には、形状検討用の試作模型も作られた。

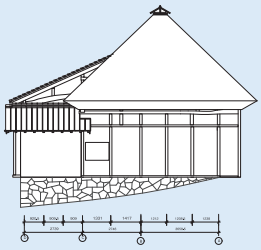
慶太翁生家の当時の様子を、東西南北よりみる

南面、西面とも寄せ棟茅葺き屋根が1階まで深くかぶっていて、古民家の美しさがあります。南の開口部はすべて板戸と障子戸で構成されています。また右の写真の北面は、茅葺き、瓦、金属屋根のアンサンブルが絶妙で、土塀と石垣のテクスチャーが呼応して、地元の材料による建築は青木村の風景に溶けこみ心が和みます。

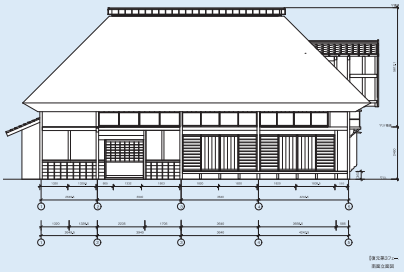
地元の材料により建てられた、茅葺き屋根の古民家の様子を再現

復元模型(下)と現況(左)を、それぞれ南西から見た図。

西側立面図
(第3フェーズ復元図)



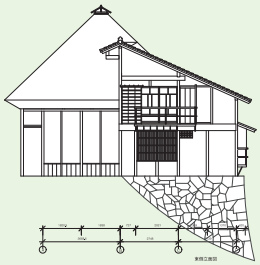
南側立面図
(第3フェーズ復元図)



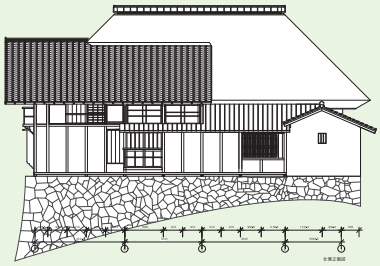
北側は、3種の材料により構成された屋根が絶妙なアンサンブルで調和

復元模型(下)と現況(右)を、それぞれ北東より見た図。

東側立面図
(第3フェーズ復元図)



北側立面図
(第3フェーズ復元図)



平面図にみる、当時と現在との違い

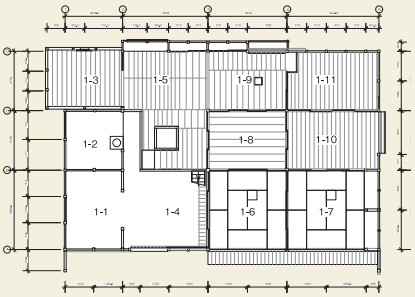
当時、1階南側の8畳間2室は畳で、その他は板張りと土間という構成でした。しかし現在は、畳部分を土間にして農機具などの倉庫としています。2階は養蚕の蚕棚があるため床は板張りでした。囲炉裏や“へっつい”のあった台所は、吹き抜けとなっていました。

当時と様子の異なる囲炉裏の間、畳の間は改築され、現在は農機具倉庫に

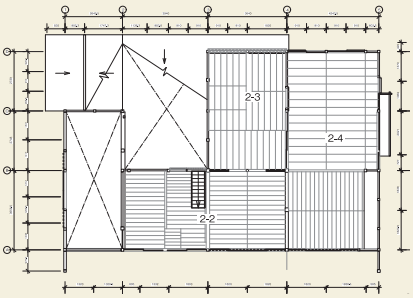
1階囲炉裏の間、および居間の様子。復元模型(左)、現況(上)。

復元模型で見る、囲炉裏の間の上部の様子。上部が吹き抜け構造になっているのがよく分かる。

1階平面図(第3フェーズ復元図)



2階平面図(第3フェーズ復元図)



建築学科・勝又教授と学生インタビュー 模型制作者に聞く

実測・模型制作プロジェクトに取り組んでみて

今も謎が多い、慶太翁生家の歴史

青木村にある古民家は、素朴なものと複雑に作り込んだものの二極化の傾向があり、建築された時代による差と思われますが、慶太翁の生家は約150年の年月を経ており、そのどちらの傾向も備えています。建築年代がさらに遡りそうな小さくて古い蔵、この地域の建築物の特徴である作りこんだ北側の増築部分など興味深いポイントもあり、登録文化財としての価値は十分あると思います。調査対象物としては、増改築を繰り返したため、複雑で難易度の高いものでしたが、非常にやりがいもありました。

この建物は、もともと5フェーズで増改築がされたと考えていましたが、その後、現地調査を重ねた結果、今は6フェーズであったと考えています。それは、2階はもともと一気に増改築されたと考えていましたが、壁などの痕跡、2階増築時に切られたであろう垂木の断面のすすけ具合などから、2階の増改築も2回にわたり行われたと判明したためです。そのうち慶太翁が住んでいた時代は、第3フェーズ（1860～1931年）であると推定しました。慶太翁の勉強部屋はヒヤリングと「五島慶太の生い立ち」に掲載されている写真によると、北側1階の「1-9」の部屋（1階平面図参照）と推定されますが、はっきりとはしていません。

古民家の増改築は、部材の使い回しなども頻繁に行われたために、再利用され失われた材料も多く、この建物の最初の姿など、まだ分かっていないことも多くあります。今回第1フェーズとした以前にも、“第0フェーズ”があったのかもしれません。

ものづくりの面白さに目覚めた約1ヵ月間

実測は丸4日間、10人で行いましたが、今回は最終的に模型を作るという目的があり、実測の精度は、通常よりワンランク高い精度で行いました。その後、復元図作成、模型作成用の図面、完成模型用の試作模型、模型施工部材図と進めました。屋根のかかり具合など、試作模型を作り初めて分かった部分もありました。

制作途中の様子。精密な部品の切り出しには、レーザー加工機が効果を発揮した。（左）

右から勝又教授、堺皓亮さん、寺林大樹さん。（右）

細かい部材は、今回は設計デジタルデータから直接レーザー加工機で切り出したので、非常に精密なものができました。とはいえ、切り出し時のレーザーの燃えしろなども計算してデータを作成しなければならず、大変精密な作業となりました。殊に、ホウキを分解して作った茅葺屋根は、今回もっとも苦労した部分です。

壁の厚紙にスプレーを吹いて塗り壁の質感を出したり、陰影のつくよう塗料を塗り重ねたり、瓦のディテールをどう再現するか工夫したりと、約1ヵ月間の模型制作は、本当に家を建てているような気分でした。本来固定する予定だった扉も、最後にはこだわりが生まれ、扉を開くようにしたりと、ものづくりの面白さにも目覚めました。

同級生2人でやっていると、それぞれ作り方が違うので議論になることもありましたが、今にして思うと、大変ながらもとても楽しい仕事だったと思います。

（勝又教授、堺皓亮さん、寺林大樹さんのインタビューより構成）

「都市大の歴史と五島慶太翁の功績」を五島記念館にパネル展示

―慶太翁の生家実測模型も、実物を展示―

武蔵高等工科学校、東横商業女学校の創立以来の歴史と現在の東京都市大への発展の経緯をビジュアルに紹介した展示コーナーが、都市大世田谷キャンパスの五島記念館エントランスに開設されました。展示は、都市大の歴史をたどるコーナーと、都市大グループの祖である五島慶太翁の業績を紹介したコーナーから成り立っています。

創立者の建学の精神、五島慶太翁が武蔵工大の経営を引き受けたいきさつ、当代随一の事業家であった五島慶太翁が教育にかけた情熱などを解説した展示は、学生たちが都市大で学ぶ誇りや教職員が働く誇りを醸成し、さらなる発展の礎として受験生への認知度向上にも繋げたいと考えています。ぜひ一度ご来場ください。

（左上）「都市大歴史展示コーナー」オープニングセレモニー。（左下）五島慶太翁の人柄と教育への情熱を紹介。（右上）創立以来都市大の発展につくしてきた方々を紹介。（右下）慶太翁の生家実測模型も展示。